

石風呂の現在

香川県さぬき市の塚原から風呂を事例に

小林宏至

1. はじめに

石風呂とは、かつて瀬戸内海沿岸を中心に多くみられた、石室（いしむろ）を利用した「サウナ」である。風呂というと、現代の日本社会では一般的に浴槽に湯をはる入浴スタイルをイメージすることが多いが、こうした湯につかる入浴は近世、近代以降に定着していったものとされている。かつての風呂は蒸気浴が主流であり、石風呂は寺社や村落によって管理され、ひろく人びとに親しまれていた。石風呂は岩壁をくりぬいて造られたものや、石を積み上げて石室を造ったものなど、さまざまなタイプがあるが、基本的に石室を高温に熱した後、蒸気浴を行うという形式がとられている。石風呂の語源は、この石（イシ）で造られた室（ムロ）である石室（イシムロ）が、石風呂（イシフロ）へと変化したものであるとされている（柳田 1962（1915）：404-408）。

もちろん日本には古来より各地に温泉が湧いていたため、湯につかる文化が存在していなかったわけではない。ただ水利的な条件や地理的な制約が少なく、技術さえあればどこにでも造れる石風呂は、庶民の生活において、より身近なものであった。たとえば山口の徳山藩において、はじめて徳山領内において沸かした湯を利用した銭湯がつくられたのは、1773年（安永2）であったとされるが、それ以前から同地の人びとは柳井、周防大島、厳島などの石風呂に頻繁に通っていたことが記録されている。また徳山の真福寺の石風呂には（温泉を有している）山口湯田の方からも訪問客があったという記録が残っている（吉積 2011）。このことから温泉や湯屋の有無にかかわらず、石風呂は温泉とはまた違う入浴文化として、古来よりひろく定着し、親しまれてきたことがわかる。

ではこうした石風呂および石風呂文化はいつから存在していたのであろうか。形状が類似している京都八瀬の窯風呂¹にその起源を求めることもできるが、現存する石風呂の多くは、行基（668～749年）、空海（774～835年）、重源（1121～1206年）の功績をその起源として語っている²。そのため、これらの僧侶が活躍していた奈良から平安期にかけて、瀬戸内を中心に石風呂文化はひろまったと考えられる。石風呂は病氣療養や労働者への慰労という意味も兼ね、寺社あるいは地域の有力者によって管理・運営されてきた。

18世紀後半、徳山藩においてはじめて湯屋が登場するように、19世紀から20世紀にかけて石風呂文化は徐々に後退し、浴槽に湯をはった入浴文化にとって代わられるようになる。ただ水が貴重であった瀬戸内（特に島嶼部）にあっては、20世紀半ば以降も石風呂を主流とする入浴文化が旺盛であった。周防大島では20世紀初頭であっても石風呂が大いに活用されていたことが印南敏秀の調査資料などからうかがえる（印南 1986：366-385）。このように瀬戸内には多くの石風呂が存在してきたが、20世紀半ば以降、やはりその風習は廃れ始

め³、同時に各地の石風呂は文化財指定を受けるようになる。文化財指定がもっとも早かったのは山口県の石風呂で、1935年に山口県の野谷の石風呂が国の文化財に指定される。続いて1958年には山口県の岸見の石風呂と山口県の久賀の石風呂が国指定文化財となる。一方、大分県では1965年に山香の石風呂が、1968年には尾崎の石風呂が国指定文化財となった⁴。

このように19世紀から20世紀にかけて石風呂および石風呂文化は徐々に失われていき、20世紀半ば以降は消滅、あるいは保存・保護の対象として文化財化していく。こうした状況において当時の石風呂文化を記録し、体系的に整理したのが民俗学者、印南敏秀であった。印南は『東和町誌 石風呂民俗誌 もうひとつの入浴文化の系譜』(2002)において、西日本、とりわけ瀬戸内にひろがる石風呂文化を網羅的に記録し、各地の石室の常態、利用状況、石風呂に携わる人々の語りを集め、まとめあげた。しかし2026年現在、印南の調査からは既に四半世紀の時が経ち、石風呂をとりまく状況はさらに大きく変化している。1年を通して「定期的」に焚かれている石風呂は日本で3件のみとなってしまった⁵。それは毎年1月1日に焚かれる大分県豊後大野市の辻河原石風呂、夏場を除き毎月1回焚かれる山口県山口市徳地の岸見の石風呂、そして毎週木曜日から日曜日にかけて週に計8回焚かれる香川県さぬき市の塚原から風呂である。

これまで消滅していった他の多くの石風呂と同様に、もはや石風呂は個人あるいは法人での運営が困難な状況になってきている。そのため現存するこれらの石風呂はいずれも保存会によって管理されている。ただ、そのなかでも特異なのが香川県さぬき市の塚原から風呂で、同施設では現在でもなんと1日2回、週8回、石風呂（から風呂）が焚かれ続けているのである。本論はこのような失われつつある石風呂および石風呂文化のなかで、現在でも「通常営業」を続けている塚原から風呂の現状を記録するとともに、なぜ他の石風呂と異なり同施設が存続し得たのかということ、塚原から風呂の歴史的経緯やそれを取りまく状況から明らかにするものである。

2. 石風呂をとりまく現状

2.1 石風呂の概要と類型

石風呂とひとことでいっても、その構造や石風呂内において好まれる香りなどは、地域ごとに異なっている。こうした各地域の石風呂の文化は、印南敏秀『東和町誌 資料編 4 石風呂民俗誌：もうひとつの入浴文化の系譜』に詳しい。紙幅の関係もあり、ここでは簡単に石風呂内で好まれる香り、そして焚き方について整理しておきたい。先に述べた通り、石風呂は石室内で蒸気浴を行うわけだが、その時に発生する蒸気の香りも利用者にとっては重要な嗜好的要素となっている。石風呂で親しまれる香りは、大きく二分することができ、一方は石菖（セキショウ）やヨモギを用いたもので、他方はアマモやモバと呼ばれる海藻を用いたものである。いずれも石風呂内における芳香（アロマ）としての役割を果たしており、療養として語られることもある。石菖は山口県の岸見、大分県の豊後といった山間部に多く、

アマモは瀬戸内一帯でひろく親しまれている。そのためここでは便宜的に【沢系】と【海系】の香りとして両者を整理しておきたい。

現在は既に営業されていないものの、かつての記録からも【沢系】と【海系】両方の石風呂が瀬戸内各地に存在したことが印南の記録からもうかがえる。たとえば【沢系】であれば豊後、鉄輪、岸見などがあり、石菖やヨモギが使われていた。一方、広島県の丹那、竹原、山口の周防大島、愛媛県の今治などはアマモが使われていた（印南 2002）。本論で主たる調査地となる塚原から風呂は、かつてこそアマモを敷いていたとされるが、現在は芳香となるものは使用していない。ただ【海系】の石風呂同様に現在でも石室内に塩水⁶を撒いて蒸している。

また石風呂の焚き方に関しても大きく異なる部分がある。石風呂は松、ヤマシダ、廃材などを燃やし石室を焚くが、大分県の豊後各地や杵築市山香の石風呂のように、石室とは別に、燃料をくべるための空間が石室下部にあり、そこから石室をあたためるという形状のものもある。このように地域によって好まれる芳香や焚き方など細部が異なっているが、その基本的な構造や利用方法はいずれも共通している（表 1）。

表 1 芳香と焚き方の分類（現存する石風呂を例に）

名称	場所	芳香等	焚き方
辻河原石風呂	大分県豊後大野	【沢系】	石室の下から焚いて蒸す。
岸見	山口県山口市徳地	【沢系】	石室を熱した後、燠 ^{あつ} を掻き出す。
塚原から風呂	香川県さぬき市	【海系】	石室を熱した後、ムシロを敷く。

2.2 石風呂をとりまく環境の変遷

石風呂は西日本に多く散見される一方、東日本にはその存在を確認でき「ない」。石風呂に関する文献の多くは、瀬戸内を中心としており、文字資料としては近世以降に多くなる。ここでは、石風呂と石風呂へのまなざしの変遷を時代とともに概観し整理しておきたい。本論でとりあげる塚原から風呂も以下で述べる状況とほぼ同じ経緯をたどってきた。

近世における文書記録からみてみよう。石風呂は、瀬戸内海沿岸部を中心に分布してきた蒸気浴施設であるが、石風呂に関する文字資料は近世の地誌や日記類からも確認することができる。山口県周辺においては、たとえば『防長風土注進案』において、山口地域一帯に石風呂が存在し、人びとに利用されていたことが記されている⁷。また、徳山毛利家文庫の「御蔵本日記」からは、徳山藩の人びとが巖島や柳井、大島など各地の石風呂を利用していたことが記されている（吉積 2011）。加えて 1820 年（文政 3）の『石風呂入治記』（保田家文書）には、元禄期以来、石風呂を目的として瀬戸内海を往来する人びとの存在が記されている（西本 2008）。このように近世の日記文書などからは、当時の人びとが地域内あるいは地域を横断して娯楽や療養目的で石風呂を利用していたことがうかがえる。

その後近代に入ると、石風呂は医療的観点から改めてまなざされるようになる。春名英之・大谷周一「石風呂（伊予国桜井町）ノ医学的調査」（1927 年）では、石風呂での湯治実験が行われ、体重、尿、血液（白血球数など）、血圧が測定され医学的な効能が議論された。また同文献内では先行研究として、岡田和一郎や藤浪剛一の実績にも触れられており、少なくとも 19 世紀末よりこうした研究が行われていたことがうかがえる。また藤浪剛一は『東西沐浴史話』（1931 年）を出版しており、石風呂を入浴文化史のなかに位置付け論じ、その分布状況などについても言及している。また同時期に渡邊琢一も「瀬戸内海沿岸地方の石風呂に就いて」（1933 年）にて、福岡の釜風呂との比較検討を行いながら、石風呂の医学的効能を論じている。こうした研究は石風呂を民俗文化や民間療養施設としてだけではなく、近代医学の観点からその効能を探求しようとする試みであった。

しかし 20 世紀半ば以降、生活様式の変化とともに石風呂は日常生活から徐々に姿を消していく。森直木「今治附近の石風呂の研究」（1949 年）では、石風呂が戦禍にあったり、引揚者の住居となったりすることもあり、営業を中止・廃止せざるを得なくなっている状況について論じている。この時期に複数の石風呂が文化財化していったことは先に記した通りである。また一方でこの時期、失われゆく民俗、あるいは「物珍しい民俗」として観光・娯楽的文脈でも取り上げられることも増えていった。たとえば雑誌『日本カメラ』において「石風呂にて」というタイトルで半裸の女性の写真が掲載されたり、また伊能孝の紹介記事（1967 年）では、「おすべはぬきの原始トルコ風呂 秘湯、桜井の石風呂（愛媛・今治市）」と題され、石風呂を知らない読者の好奇心を掻き立てていた。とりわけ東日本人々にとって石風呂や石風呂文化は大変奇異なものとして映っていたようである。

石風呂および石風呂文化をはじめて本格的に調査し、民俗学的に研究したのが印南敏秀であった⁸。つまり 1980 年代まで石風呂はほとんど大規模な民俗調査が行われていなかったということになる。印南は『石造物』山口県大島郡東和町編纂（1986 年）、雑誌『あるくみるきく』（1987 年 特集「瀬戸内の石風呂を訪ねて」）を通して、その現状と実態を整理し、『東和町誌 石風呂民俗誌：もう一つの入浴文化の系譜』（2002）において、石風呂研究をひとつの到達点へと導く。同書では山口、広島、岡山、愛媛、香川、徳島、大分などで当時営業していた石風呂を調査し、営業形態や石風呂の形状、道具、信仰対象などを細かく記録、分析している。また同書は、石風呂の経営者や保存会、そして常連に対して聞き取り調査も行っており、当時の状況を丁寧に記録した貴重な資料となっている。しかし、同書刊行から 20 年以上の歳月を経た現在（2026 年）、愛媛県今治桜井の石風呂（2009 年閉業）、広島県忠海の岩乃屋（2016 年閉業）をはじめ、多くの石風呂が姿を消すこととなった。ただそうしたなか、現在でも唯一「通常営業」を続けているのが、香川県さぬき市の塚原から風呂である。以下より現在の塚原から風呂を詳らかにし、その現状と継承されてきた背景について論じていく。

3. 香川県さぬき市の塚原から風呂

3.1 塚原から風呂の歴史

讃岐地域一帯では、古くから石室を利用した石風呂を「から風呂」と称し、親しまれてきた。塚原から風呂の近隣には、水主^{みずし}の石風呂や井戸の石風呂などがあり(太田 2020:68-70)、行基の時代(7~8 世紀頃)から継承されてきたと語られている。文書としては江戸時代後期(1850 年代)に成立した『讃岐国名勝図会』において、当地の「から風呂」が言及されており、現在の常態とは多少異なるものの、記録としてその存在が確認できる。近代以降の塚原から風呂に関しては、塚原から風呂保存会会長の小林憲一さん(1947 年生まれ)、さぬき市シルバー人材センター事務局長の松木正美さん(1948 年生まれ)、塚原から風呂保存会が発行しているさまざまな資料、オンライン上で発信しているデータ、施設内の石碑や掲示物などに基づいて記述していく。

塚原から風呂は、20 世紀初頭は大変に賑わっていたようで、1911 年(明治 44)に石室を 1 つから 2 つに増やしたとされる。この時新たに新設されたのが東側の石室であり、もともとあった原型とほぼ同型のものが造られたという。この「から風呂」は代々「風呂番」として筒井家によって継承されてきたが、1963 年(昭和 38)⁹に筒井國太氏が亡くなったのを期に閉業することとなった¹⁰。だがこの状況を見かねた長尾町の医師である間嶋禮次郎氏と大石徳一氏がともに資金を供出することで「から風呂」(の施設および土地)を買い取り、長尾町へ寄贈した。その後、同施設は地域の老人会によって塚原から風呂として管理・運営されていくこととなる。

長尾町は 1972 年(昭和 47)、同地に老人福祉センターを設置し、以来「から風呂」の運営は長尾町社会福祉協議会へと移管されることとなった。長尾町社会福祉協議会の所在も同地に置かれることとなる。平成のふるさと創生事業(1988-1989 年)の際に、この地を高齢化社会に対応する福祉の里として整備する方針が定まり、香川県初の地域福祉センター「行基苑」および老人ホーム「行基ハイツ」が建設されることとなる。そして塚原から風呂に隣接する場所に、長尾町の社会福祉組織や社会福祉施設がつくられていった。

2002 年(平成 14)、いわゆる「平成の大合併」により香川県大川郡の 5 町(津田町、大川町、志度町、寒川町、長尾町)は「さぬき市」として合併することになり、長尾町社会福祉協議会は、さぬき市社会福祉協議会へと再編される。それに伴い「から風呂」の運営も長尾町からさぬき市の社会福祉協議会へと引き継がれることとなった。しかし管理がさぬき市に移行して以降、利用者の減少等の理由から公的支援の打ち切りが決定し、2007 年(平成 19)3 月末で営業は一度休止することとなる。しかし地元有志の力によって、翌 2008 年(平成 20)3 月に「から風呂保存会」が結成され、同年 7 月に営業が再開されることとなった。以降、塚原から風呂は社会福祉協議会ではなく「から風呂保存会」によって運営されている。

3.2 塚原から風呂の営業形態

塚原から風呂は、香川県さぬき市昭和 1050-4 に位置する福祉施設であり、さぬき市からの委託を受けた「から風呂保存会」によって管理・運営されている。毎週木曜日から日曜日までの 4 日間が営業日となっており、営業時間は昼の 12 時から 21 時である。「から風呂保存会」は現在 9 人で構成されており、早番と遅番の 2 交替制をとっている。年末年始と 8 月の夏季休業期間などを除き、毎週 4 日間の通常営業が行われている。料金は 2025 年 5 月まで 500 円であったが、現在（2026）は料金が改訂され 700 円となった。かつては軽食などの提供もしていたが、現在はサウナグッズや野菜の販売のみを行っている。

塚原から風呂の受付は 12 時から始まるが、火入れ作業のため 9 時頃から準備をする必要がある。そのため保存会は 9 時頃から 21 時過ぎまで交代しながら受付や清掃、片づけなどの業務を行っている。当日係となっている「から風呂保存会」の担当者は 9 時頃には施設に到着し、受付の準備、トイレやシャワー室の清掃などを行う。石室を温めるためには 2 時間の準備時間と 1 時間の蒸し時間を要するため、9 時過ぎから石室の火入れ準備が始まる（火入れの手順や動きに関しては次節を参照のこと）。火入れを行うのは 2 つある石室のうち、昨晚「ぬるい方」だった石室となる（表 2）。11 時頃には火入れ作業が終わり、約 1 時間石室内を塩水で蒸す。12 時の受付開始前にあわせて玄関前の軒先には販売用の野菜などが並ぶ。12 時になると受付がはじまり 1 時間前から蒸していた石室が「あつい方」として開放され、昨晚「あつい方」として利用していた石室が今度は「ぬるい方」として開放される。

表 2 石室の火入れローテーション（2 日間）

時間	受付・控室	石室 1	石室 2
1 日目 09:00	清掃・準備	火入れの準備	
1 日目 11:00	玄関前の野菜準備	蒸し始める	
1 日目 12:00	受付開始	「あつい方」開始	「ぬるい方」開始
1 日目 15:00			火入れの準備
1 日目 17:00			蒸し始める
1 日目 18:00		「ぬるい方」開始	「あつい方」開始
1 日目 21:00	片づけ作業	板と布で密閉する	
2 日目 09:00	清掃・準備	火入れの準備	
2 日目 11:00	玄関前の野菜準備	蒸し始める	
2 日目 12:00	受付開始	「あつい方」開始	「ぬるい方」開始
2 日目 15:00			火入れの準備
2 日目 17:00			蒸し始める
2 日目 18:00		「ぬるい方」開始	「あつい方」開始
2 日目 21:00	片づけ作業	板と布で密閉する	

表 2 では 2 日間分のローテーションしか示していないが、これが木曜日から日曜日の 4 日目まで続いていくことになる。2 つの石室は「あつい方」と「ぬるい方」を午前／午後で入れ替え、1 日にそれぞれ 1 回ずつ、週にそれぞれ 4 回ずつ焚かれることになる。そのため日曜日の石室がもっとも「あつく」なり、正月や夏季休暇あけの石室がもっとも「ぬるく」なる、と語られる。「あつい方」の熱さは一般的なサウナとは異なり、焚き上がった直後は 150 度を超えるほどの高温となる。そのため利用者は皮膚を守るために頭巾を被り、毛布で身体を保護して入らなければならない。

3.3 石室の形状と休憩スペース

塚原から風呂の建屋は 20 世紀半ば以降、大きな改修を 2 回行っている。1 回目は 1972 年（昭和 47）に筒井家から長尾町によって移管された時のもので、2 階建ての建物が平屋となり、「老人福祉センター行基苑」内の「から風呂別館」として新築された¹¹。その時の図面は、「カラプロ別館」のパンフレットをもとに印南（印南 2002：281）によって作図されている（図 1）。2 回目は 1990 年（平成 2）、県のふるさと推進事業によって改修されたもので、この時に男女の脱衣所と浴室が縮小され、囲炉裏を真ん中に配置した休憩スペースが「復活」することとなる。ここで「復活」という表現を用いるのは、かつて筒井家が管理していた時代には囲炉裏があったためである。同じ形状ではないものの人々の強い要望と囲炉裏があることの利便性もあいまって、囲炉裏を中心に据えた休憩室が再現されたのである（図 2）。こちらも印南によって作図されている（印南 2002：286）。図 2 は図 1 の右側（東側）半分の天地（南北）を逆にして提示されたものである。石風呂の出口はいずれも脱衣所・休憩スペースのある北側を向いている。

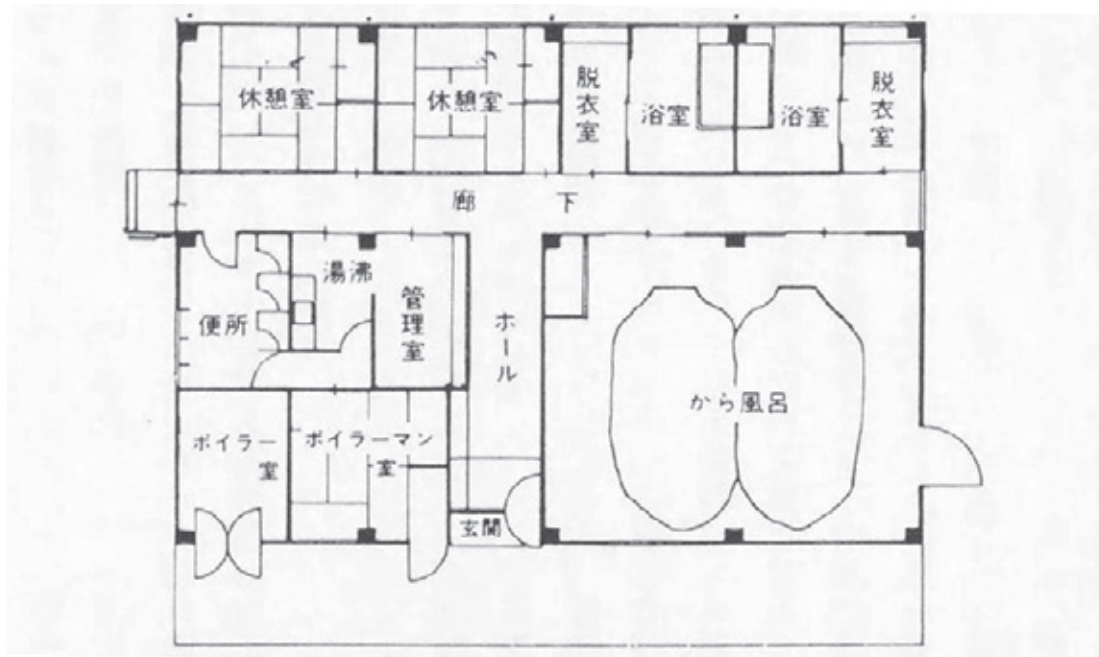


図 1 印南による「カラプロ別館」の図面（平成初期頃）

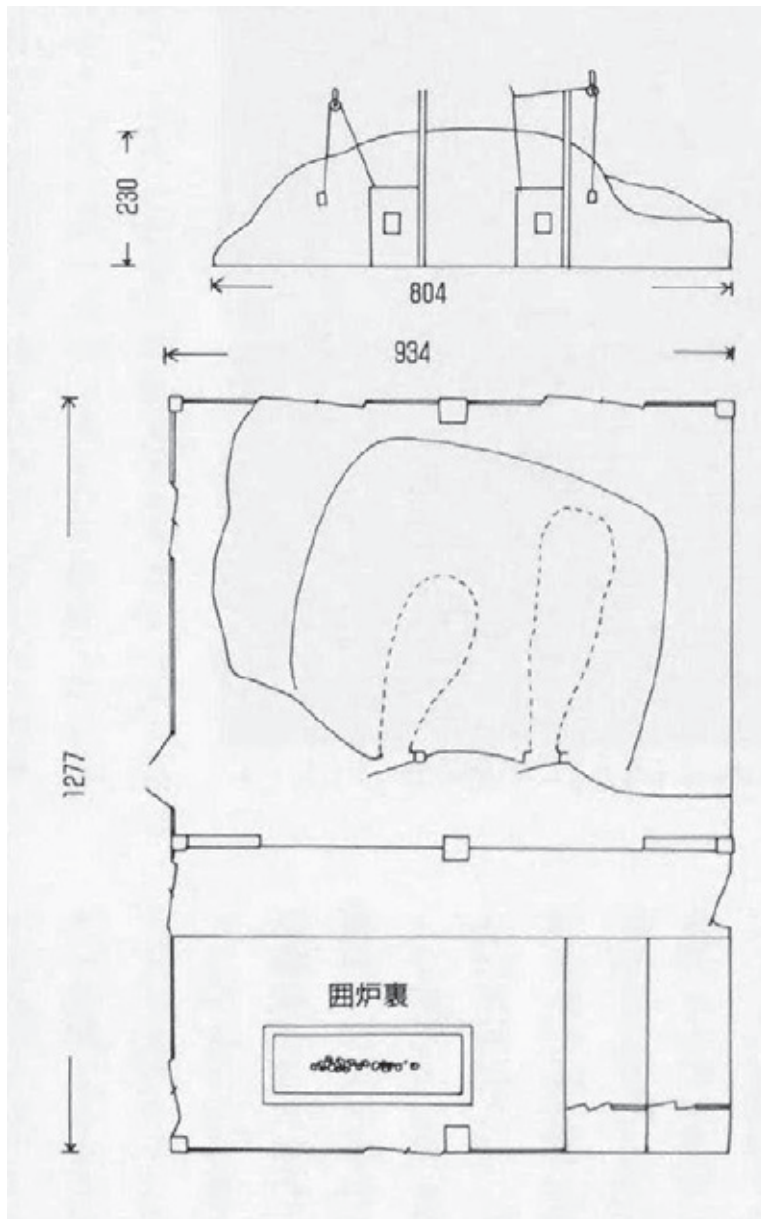


図2 印南による塚原から風呂の平面図（平成中期頃）

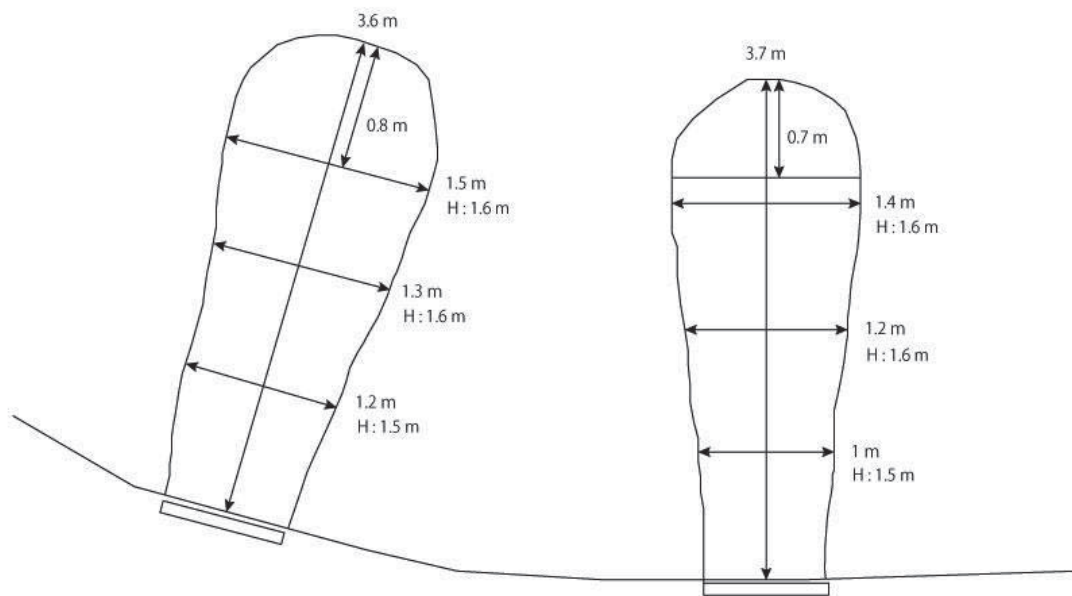


図3 現在の塚原から風呂の石室の図面（筆者作成）左側が東側で右側が西側「H:」は高さ

その後、塚原から風呂の建屋には大きな変化がないものの、石室に関しては東側にあったものが改修されることとなった。そのため印南が調査した時点で記録されていた石室の形状（図2）と、現在の石室の形状（図3）は異なっている。新たな石室の形状としては、西側の形がそのまま東側へと転用されたものとなっている。以下、現在（2026）塚原から風呂の火入れを担当している岡田俊郎さん（1950年生まれ）の話をもとに石室の性質、状態、管理について述べていく。

石室は15～16年に1回は改修しなければならない。というのも毎日高温で熱せられるため石壁や地面がひどく痛むためである。石室は豊島石^{てしまいし}という瀬戸内海の豊島で採れる石を用いている。豊島石は軽くて加工がしやすいうえ、火に強い^{てしまいし}ため石室に適している。石にヒビが入る程度であれば問題ないが、それがズレはじめると危ない。石に関しては、常連のなかに石屋がいるため、その都度相談しながら改修している。石をつなぐ粘土はハガネ（刃金土）である。元来、東側の石室の入り口はもう少し中央よりだったが、前回行った改修によって、東側と西側の石室の距離が少しあくこととなった。

石室の地面もまた非常に傷みやすい。現在は地面を土のままの常態にしており、そこにオキ（燵）を均している。以前は、石を敷いてみたり、耐火煉瓦を敷いてみたりと、いろいろと試行錯誤をしていたが、やはり地面はかなりの高温で燃せられるため、その熱に耐えられず石が動いてしまったり、煉瓦がボコボコと浮き上がってしまったりしたという。そのため

現在は最善策として地面を土のままにしておき、地面に起伏ができ始めたところで平たく均すように対処している。こうした作業は3か月に1回くらいのペースで行わなければならない。石壁は15年に1回程度、地面は3か月に1回程度メンテナンスが必要となる。

2つの石室はそれぞれ1日1回ずつ焚かれるが、温度に応じて、「あつい方」と「ぬるい方」という札が扉の左上付近に掛けられる(図4)。利用者の多くは、足袋を履き、頭巾を被り、毛布にくるまり、座布団を敷いて石室内に入っていく。扉はワイヤーを用いて自動で閉まるように設えてある。

2つの石室と対面するところに休憩スペースがある。休憩スペースの中央には囲炉裏があり(図5)、毎回、石室を焚く前に掃き出されるオキが囲炉裏にくべられる。休憩スペースは利用者に開放されており、利用者はそこで自由に座ったり寝そべったりすることができる。各々タオルを敷いて横になったり、顔見知り同士で世間話をするなどして穏やかな時間を共有している。常連同士のコミュニケーションや、旅行者と常連とのコミュニケーションもこの場で行われる。

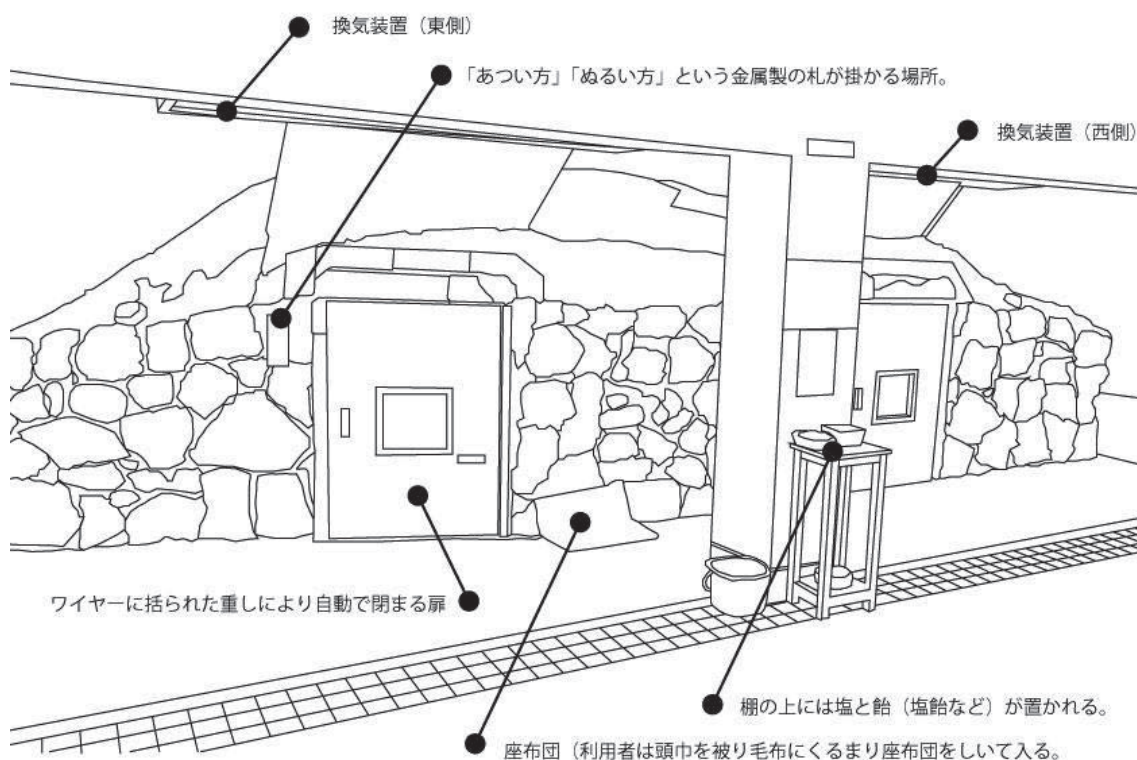


図4 塚原から風呂の石室外観(筆者作成) 左側が東で右側が西

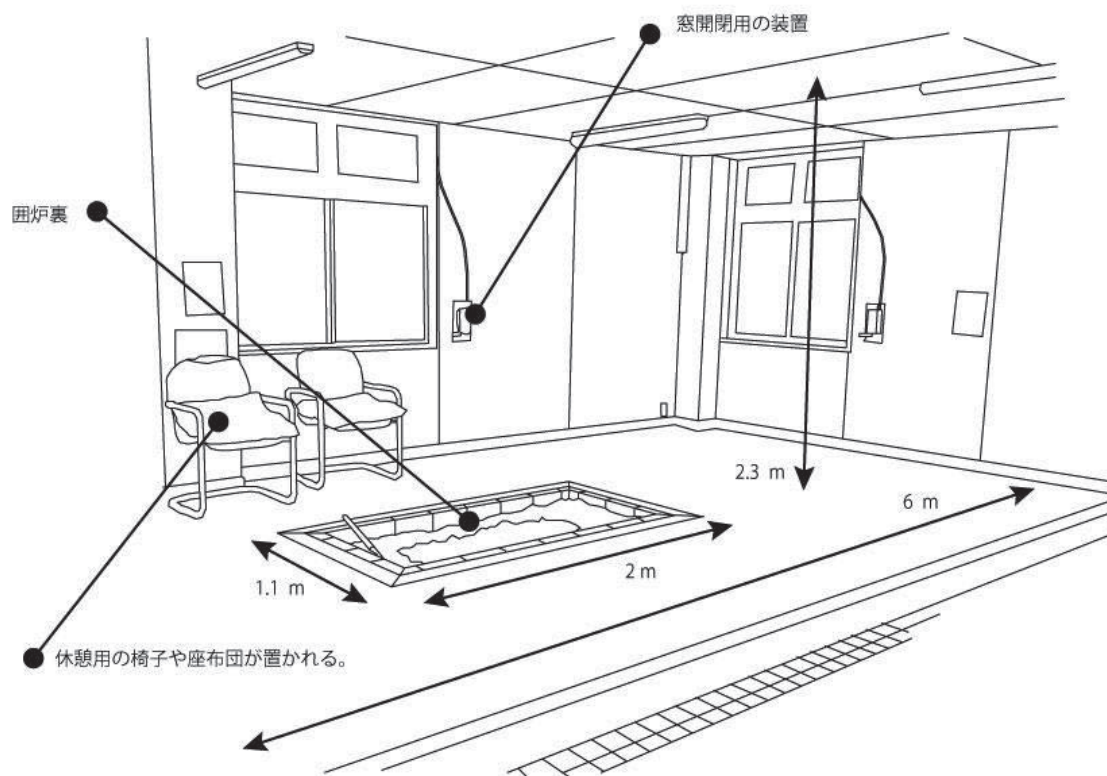


図5 休憩スペースと中央に据えられた囲炉裏（筆者作成）

3.3 営業日の火入れ作業

塚原から風呂が焚かれるのは1日2回で、12:00と18:00にちょうど焚き上がるように準備する。蒸すために要する時間が約1時間なので、11時と17時にはすべての作業を終えて、「蒸し」をはじめなければならない。火入れから扉を閉めるまでの工程は、およそ2時間を要するため、午前は9時から、午後は15時から準備を始める必要がある。午前中に「ぬるい方」だった石室は午後「あつい方」になり、午前中「あつい方」だった石室は午後「ぬるい方」になる。このように利用者は常に2つの温度のから風呂を体験することができるようになっている。

1日2回の火入れ作業を担当するのは岡田俊郎さんである。火入れ作業は、記録として残されている者として、1991年からは木内高夫さん（1931年生まれ）が担当し（印南2002：288）、2008年からは岡田俊郎さんがその役割を担っている。興味深いのは木内さんにせよ、岡田さんにせよ、未経験かつほぼ独学で焚き方を習得したということである。木内さんは「前任者との引継ぎ期間が約1週間あったが、石風呂を見るのも初めて」（印南2002：288-289）であったと語っており、岡田さんに至っては、前任者ではなく主に常連から焚き方を学んだと語る。

岡田さんはもともと高松で看板などを制作する仕事を営んでいた。2007年頃にちょうど仕事用の設備を一新せざるを得ない状況になったが、当時57歳であったため新たな設備投

資に躊躇していた。その時に当時の市議会議員に紹介されたのが、この塚原から風呂の仕事であった。石室の焚き方は、香川県庵治町から通う常連のオオタさんから多くを教わったという。オオタさんは庵治で石屋を営んでおり、この塚原から風呂に40年以上、毎日通っていた方だという。岡田さんは「やり始めて数年は試行錯誤の連続」「最初の5、6年はいろいろとやり方を変えてみた」「いまだに分らんです」と語る。だが「継続は力なり」と話すように、季節や状況に応じて質の高い「から風呂」を利用者に提供している。ここでいう質とは温度や湿度、下に敷いたムシロの乾き具合なども含めた完成度のことを指す。

焚き方はそれぞれの焚く人の個性によって若干方法が異なる。ただ20年近く石室を焚き続けてきた岡田さんの所作は、一切の無駄がなく熟練の域に達している。以下の表3は岡田さんが石室の「あつい方」が解放される3時間前から行われる一連の作業工程である。表3では午後の作業の様子を記述しているが、これとほぼ同じ作業が午前9時から12時にかけても行われている。

表3 営業日における火入れの作業（2026年1月17日午後の記録）

時刻	作業場所	作業内容
15:00	薪割り場から、石室前まで	併設されている薪割り場から、一輪車（荷車）を用いて薪を運び込む。ケースに入ったもので2ケースずつ合計6ケースを運ぶ（写真1）。
15:08	石室前	札の掛け替えを行う。「ぬるい」札を「あつい」札へと替える。
15:11	薪割り場から石室の手前まで	着火用の松葉と、焚き付け用の細い木材を運び込む。
15:11	石室前	作業道具や着替え（長靴、Tシャツ、手ぬぐいなど）を準備する。
15:13	囲炉裏	囲炉裏に残っているオキを小さなスコップで外側に寄せ中心部分をあける。
15:14	石室前	手袋をはめて石室前のマットを除ける。 ハウキとチリトリで石室の入り口前を清掃。石室のドアにかけられた（自動扉用）ワイヤーを取り外す。
15:17	石室内	石室内に敷かれていたムシロを1枚ずつ外に出していく。合計で6枚。外に出した後、軽く払ってくるくると巻いていく。
15:22	石室前	石室の入り口前を清掃。
15:24	石室内	防塵マスクをつけ、頭巾を被る。金属製の熊手で石室内のオキを集め、囲炉裏の方へ入れていく（写真2）。これを何度か繰り返していく（常連が囲炉裏の方でチ

		リトリを受け取るなどして手伝う)。
15:28	石室内	細かなオキを入口の方へ集めていきチリトリで回収する(計3回)。取り切れない小さなオキはまたホウキで石室内へ戻す。
15:30	外の作業場	【建具屋が来たため対応】
15:33	石室内	ケースに入った薪を、ひと箱ずつ入口付近から石室奥の方へと投げ入れていく。
15:34	石室内	石室奥へと入り、薪を1本ずつ組み上げていく。 1段目は入り口を背にして縦方向へマキを4列置いていき、2段目は横方向へ3列ずつ組んでいく。 最初に投げ入れた3ケースで3段～4段の高さまで組んでいく。
15:40	石室内	3ケース目の薪を入れ始める。続けて6ケース全部を石室内に撒いていく。井桁型で組んでいき、全部で12段～15段ほどになるまで積み上げる。下の方が大きな薪となっており、上に行くにしたがって細く軽めの薪になる。
15:45	囲炉裏の近く	(常連が窓を開けはじめる)
15:47	石室前	石室の入り口付近を掃き掃除する。小さなゴミを取り除いていく。
15:48	石室前から屋外	空いた6つのケースを運んでいく(4つ、2つの順)。
15:49	石室前	チラシの上に松葉を置く。
15:50	石室内	着火して火種を奥へ入れる。松葉から小さな板へと火を移し大きくしていく。
15:51	屋内	石室から煙が出始める。石室前を掃き掃除し、石室内を照らしていた照明のスイッチを抜いて移動する。
15:52	屋内	換気扇を稼働させる。換気扇の轟音が響きわたる。防塵マスクを外して外へ。度々、火の様子を見に戻る。
15:53	屋外(水場)	手と顔を洗う。「10分くらいしたら炎があがる」
15:55	屋外から薪割り場へ	空になった6つのケースを手で運んでいく。 「生木だからどうかなー」
15:58	屋外(水場)	服を着て水分補給。屋外を掃き掃除する。常連と話しながら煙草で一服する。
16:11	屋内・屋外	火の様子を確認する。全部で6枚のムシロを水に浸していく。
16:15	屋外	掃き掃除。2つのバケツを洗い、水を張る。塩を柄杓

		で入れてかき混ぜる。大きいバケツには2杯。小さなバケツには1杯程度入れて混ぜる。そのままバケツを石室の入り口付近まで持っていく。
16:18	石室前	火の様子を確認し、毛布や手ぬぐいなど防熱用の道具を準備する（写真3）。
16:24	屋内	窓を閉める。
16:27	屋外	一輪車（荷車）に2枚、板を這わせ、その上に濡らしたムシロを置いていく。板は車輪に対して直角に置き、その上に車輪と平行の形で縦に6本、濡れたムシロを置いていく（写真4）。ここでムシロを置く順番は、石室で敷いていく順番の逆順になる。
16:28	屋内	石室内を照らすライトを設置し点灯。再度、火の様子を確認する。この時、火の高さは40～50cmくらいになっている。
16:33	石室前	口到手ぬぐいをまき、頭巾を被り首元で縛る。手袋をつけ、メガネをかける。この時、時計を見て時間を確認する（その時の時間は16:34）。
16:36	石室前	カキ棒で石室内のオキを平たく均していき、まんべんなくオキを広げる。
16:38	外から石室内	濡れたムシロを1枚ずつ手で運び入れる。入口から1枚ずつ入れる。毛布を被り中に入って、1枚ずつ入れて広げていく。まるめておいたムシロを足下において、手前から奥へと転がすように広げていく。 1枚目が入り口付近。2枚目が右奥。3枚目が左奥。4枚目が奥の小上がり。5枚目が真ん中奥。6枚目が真ん中手前、という順になる。
16:42	石室内	塩水を石室内に撒いていく。比較的奥の方へ撒く。 撒いた後に板で入口を塞ぎ、布で抑え、棒で固定する。
16:44	屋内→屋外	バケツをもって外へ出て換気扇を消す。
16:45	屋外	外で顔を洗い服を脱ぐ。靴を長靴からサンダルへと変える。
17:04	屋外・屋内	着替えて道具（頭巾や手袋など）の片づけなどを行う。
18:00		から風呂の準備が整う。



写真1 15時5分ごろ：運び込まれた薪（最初に運び込まれた3ケース）

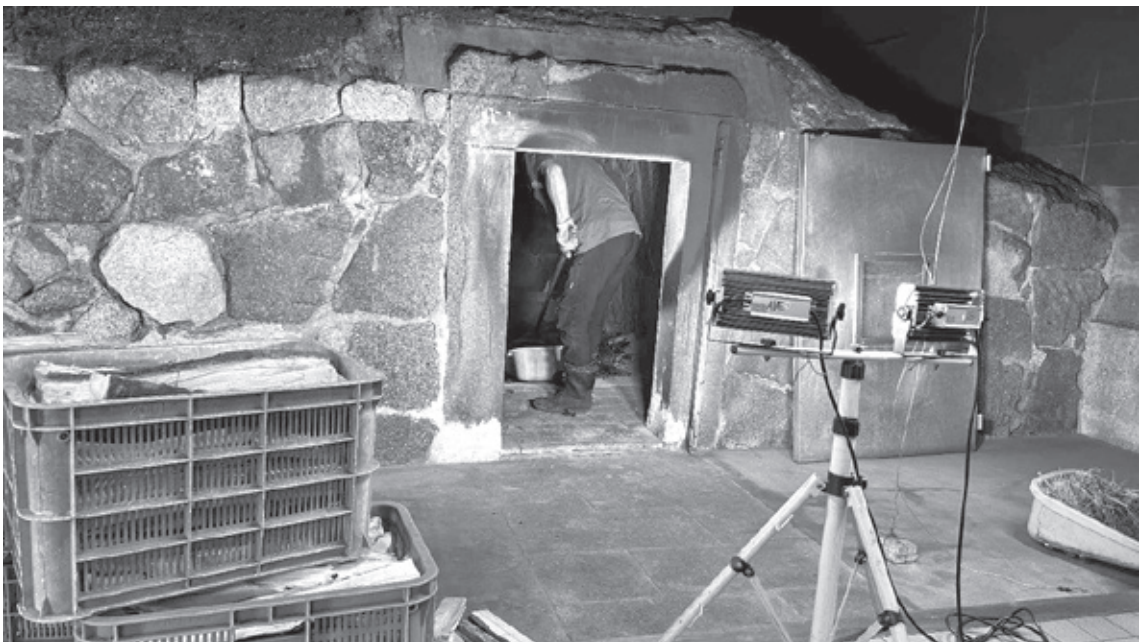


写真2 15時27分：オキを掻き出していく



写真3 16時19分ごろ：火の様子の確認



写真4 16時28分ごろ：濡らしたムシロ6枚を一輪車の上で待機させる

以上が一連の作業であるが、非常に合理的で無駄がない。たとえば濡らしたムシロを一輪車に乗せる順番も、後で石室内で敷くことを考え逆順に置かれている（写真4）。また今回は薪を6ケースほど使用したが、使用する薪の量も季節によって変えている。冬場は7ケースになることもあるが、夏場はいくら暑い日であっても薪の量は5ケース以上にしている。

というのも 4 ケース以下になるとムシロの乾きが悪くなるためである。岡田さんが火を確認する際、注意するのは火の色である。火の色（青いか赤いか）によって石室内の温度が確認される。

また興味深いのは保存会の会員ではなく、常連たちが岡田さんの作業工程を熟知しており、その時々作業を手伝っているということである。常連たちは、いつどのような作業が行われるのかということを知っており、窓を開けたり、オキの位置をずらしたり、チリトリを運ぶなどを無言でする。この日の作業中、岡田さんが時計を見たのは 1 回であった。すなわち一連の動きと時間が一体となっており、作業が身体化されているともいえる。ただ途中で建具屋の来訪があったため、その対応で一時作業場を離れることもあった。こうした事態があったとしても時間通り間に合うように余裕をもった工程で火入れが行われるのである。

3.4 塚原から風呂を利用する人々

塚原から風呂はどのような人々に利用されているのであろうか。「から風呂保存会」は、利用者に対し、受付にて「名前」「住所」「電話番号」などの情報を記載してもらっている。筆者はこのうち、「名前」と「電話番号」の項目を伏せ、個人情報が分からない状態で利用者の「住所」に関する情報の提供をいただいた。ここで記されている「住所」はあくまでも自己申告であり、かつ明確に記載されていないものも多数散見された。そのためこうしたデータは正確性には劣るが、ある程度の傾向を読み取ることはできよう。

今回整理したデータは①2024 年 2 月 22 日から 2024 年 5 月 31 日までのもの、そして②2025 年 1 月～2 月のものである。①の期間は合計 1,439 人の利用者が確認でき、②の期間は合計 552 人の利用者数が確認できた。

①の利用期間において、地元である香川県の利用者はもっとも多く 944 人、ついで徳島県 188 人、東京都 72 人、大阪府 39 人、兵庫県 27 人、神奈川県 17 人と続く。記載された地名の多い順に関しては、高松 264 人、三木町 172 人、塚原 69 人、長尾 68 人、徳島県 57 人、さぬき市 56 人となっており、これらの地域からいわゆる常連と呼ばれる人々が通っていることがうかがえる。また、②の期間においても地元の香川県が 337 人、徳島県が 33 人、東京都が 19 人、兵庫県が 14 人、神奈川県 9 人、埼玉県 5 人となっており、香川県、徳島県、東京都という順番はここ数年では一般的な傾向である。

このように、香川県内からの利用者が圧倒的に多いが、東京や大阪といった都市圏からも多くの利用客が来ていることがうかがえる。また少数ではあるが、来訪者の中には北海道、福岡県、石川県、福井県などからの来客もある他、①の期間においては、ノルウェーから 2 人、タイから 1 人、フィンランドから 2 人、イギリス（ロンドン）から 2 人、②の期間においては、メルボルンと台湾から 1 人ずつ来訪があるなど、海外からの利用者も断続的にはあるが確認することができた。

こうした状況はかつての石風呂の利用者とは一線を画している。石風呂に関する統計的

なデータは極めて少ないが、印南が入手した山口県柳井にあった土穂石^{つっぽいし}の石風呂の 24 年間（1950 年～1975 年：一部欠失）の記録に基づけば、柳井近辺から来る利用者が 95.3%、山口県内からが 3.0%、県外からが 1.4%、不明が 0.3%と圧倒的に近隣地域からの利用で占められていた（印南 2002：416-432）。また県外といっても多くは隣接地域でもある広島からの利用者が多く、基本的にこの時期（20 世紀半ば）の石風呂は、利用者の多くが近隣地域のみからやって来たといえる。こうしてデータを比較してみると、現在の石風呂（から風呂）の利用者が過去と比べ、いかに多様な国、地域からやって来ているかがわかる。

4. 21 世紀まで残った石風呂（から風呂）

4.1 塚原から風呂が存続し得た背景

塚原から風呂は、幾多の困難を乗り越え、多くの課題を残しつつも営業を続けることができています。では、なぜ塚原から風呂のみが他の石風呂とは異なり、存続し得たのでしょうか。この理由を探ることは、逆にいえば、塚原のから風呂が他の石風呂と何が異なっていたのかということ明らかにすることでもある。もちろん、こうした議論から何か決定的な要因を突き止めることはできないが、少なくとも現状を説明するだけの多くの示唆をそこから得ることができよう。ここでは①公共化、②焚き手の確保、③地域における連携という 3 点に絞って議論を進めていく。

まず①公共化に関してだが、これは②焚き手の確保、③地域における連携とも重なる重要な部分である。印南（2002）の文献に紹介されている多くの石風呂は個人所有という形で経営がなされていた。そのため、行政からの支援が受けにくく、土地や権利の継承も簡単ではない。一方で塚原から風呂は、筒井家の筒井國太没後（1963）、すぐに地域の篤志家によって施設と土地が買い取られ、長尾町へ寄付されることとなった。このことにより他の石風呂に先んじて公的支援を受け、施設を拡充し、石風呂の維持管理を安定的に行うことが可能となったのである。このことは本論 3-1 でも触れた通り、長尾町社会福祉協議会と老人福祉センターの土地への設置（1972）、香川県初の地域福祉センター「行基苑」および老人ホーム「行基ハイツ」の建設（1992）など公的支援によるサポートがあったことが明らかである。またこのことは②焚き手の確保においても重要な意味をもつ。

②焚き手の確保に関しては、塚原から風呂が公的機関の一部となっていたため、焚き手を「さぬき市社会福祉協議会の臨時職員」として雇用することが可能であった。焚き手の給与は、「老人福祉費」から臨時職員の「人件費の補助」の名目で支払われていたのである。必ずしも高額な給与が払われていたとはいえないが、社会保障や雇用の安定という観点から、こうした対応は焚き手の確保と継承において非常に重要であった¹²。

しかし 2019 年、さぬき市は財政の見直しにより、焚き手を社会福祉協議会の臨時職員から解雇することを決定した。そのため焚き手の給与は市から支払われるのではなく、「から風呂保存会」から支払われることとなった。「から風呂保存会」は、市から臨時職員（焚き手）の人件費に充てられていた予算を、「から風呂運営委託料」として受けとり、それを焚

き手へ給与として支払うという方法をとっている¹³。このように行政機構の変化や行政の意向により、運営が困難に直面することもあったが、どうにか焚き手への給与が安定的に支払われるよう、「から風呂保存会」およびその常連たちは市に働きかけてきた。これが③地域における連携と関係してくる。

③地域における連携は、行政・民間を問わず多くの関係者・常連が、塚原から風呂を支えるために動いてきたという経緯がある。古くは筒井家の土地を買い取り長尾町へ寄付した2人の篤志家。また知識や技能の継承において、現在の焚き手である岡田さんに焚き方を教えてきた常連のオオタさん。塚原から風呂を維持するために、行政的な支援へと接続するノウハウをもつ市の職員や社会福祉協議会の関係者、こうした人々が塚原から風呂と深く関係し、積極的に支援することによって、困難に際してもうまく立ちまわり、同施設は今日まで存続してきたのである。

塚原から風呂を維持していくために必要な資材や石の管理に関しても常連（専門家）の力が大いに発揮されている。岡田さんの話によれば、石室を焚くための資材は、建具屋などが廃材を提供することによって成り立っている（実際、本論3-3で記したように定期的にこのような来訪がある）。またオオタさんをはじめとし、多くの石屋が常連のなかにもいることも、石室の安全確保やメンテナンスを行う上で重要な要素となっている。このように塚原から風呂は「から風呂保存会」のみならず多くの常連、から風呂愛好者が、サービスを受ける利用者としてだけでなく、施設を支えるアクターとして積極的に参与することによって今日まで存続することができたのである。

4.2 「古代サウナ」としての再評価

地域の常連に愛され続けてきた塚原から風呂であるが、3-4で見たように、近年は香川県以外、また国外からの来客も増えている。その背景にはインターネットによって気軽に石風呂（から風呂）の情報を得られるようになったこと、また2010年代後半から始まるサウナブームの影響があるといえよう¹⁴。インターネット上の記事に関しては枚挙に暇がないが、とりわけ2020年前後から塚原から風呂は「古代サウナ」という謳い文句で称されることが多くなる。たとえば「瀬戸内の古代サウナ守れ」『高知新聞』2020年4月13日（17頁）、「古代サウナで“ととのう”」『四国新聞』2022年12月24日（11頁）といった新聞記事のほか、雑誌『旅の手帖 2023年12月号』の「まだまだ、もっとサウナ旅」という特集においても「1300年前からあった？ につぼん“古代サウナ”」と題して塚原から風呂がとりあげられている。このように、サウナブームに前後して、塚原から風呂はいつしか「古代サウナ」というキャッチフレーズとともに語られるようになった。

同様にこのころからメディアにおける露出も増えていく。2023年5月9日NHKBSプレミアム「新日本風土記『瀬戸内の春』」にて、塚原から風呂がとりあげられる。2024年5月10日、西日本放送 every フライデーでは「奈良時代から続く古代サウナへ！」と題して同施設が紹介され、2024年6月24日にはNHK「鶴瓶の家族に乾杯」にて、俳優の松山ケン

イチが塚原から風呂を体験した。こうした経緯もあってか、塚原から風呂は2024年にTTNE株式会社が主催する「SAUNACHELIN (サウナシュラン) 2024」にノミネートされている。これは「今訪れるべき全国のサウナ施設」を、「プロサウナー」が審査し、表彰するもので、塚原から風呂も2024年にノミネートされた11施設のうちのひとつとして表彰された。

このように塚原から風呂は、2020年代ごろから徐々にメディアに取り上げられるようになり、地域住民に加え多くの観光客、サウナ愛好者を迎えることとなる。さらに近年では国外からの観光客も増加傾向にある¹⁵。こうした状況は少なからず「から風呂保存会」の活動、意識にも影響を与えている。焚き手である岡田さんは「最初の10年は本当に厳しかった。でも少しずつ知られるようになったね。継続は力なりとは本当」と語る。塚原から風呂は2019年に一時的にはあれ行政の支援が打ち切られたこともあり、その存在意義を地域の高齢者、あるいは地域の社会福祉だけでは説明し得ない状況に置かれてきた。そのため、こうした観光資源としての再発見、文化資源としての再評価は「から風呂保存会」の人びとにとっても重要な意味を持つ。「から風呂保存会」のウェブサイトにおける「おしらせ」のページでは、2024年半ばまで主語がない文体で情報が掲示されていたが、2024年6月から「奈良時代から続く歴史あるサウナ風呂『からふろ』」を主語として、お知らせを掲示している。このように客体化された「自文化」を積極的にとりこむことによって、塚原から風呂はまた新たな形態へと変化しつつある。

5. おわりに

本論は20世紀半ば以降、消滅していった多くの石風呂のなかで、いまだに週4日計8回焚かれ続けている塚原から風呂を対象とし、その現状を記録するとともに、なぜ塚原から風呂が存続し得たのかということ、さまざまな状況や背景から複合的に論じていった。結論としてもっとも重要であったのは、石室が痛んだり、石風呂（から風呂）文化が消失する前の早い段階で、施設（土地）を公的化し、行政からの支援を受けることができたということであった。また塚原から風呂を維持するための支援や活動を行うだけの人的資源も豊富にあったということが、塚原から風呂の存続において極めて重要であった。つまり、常連の中にはさまざまな専門家（公務員、資材関係、石屋など）がいたことで、さまざまな問題に適切に対処することができたのである。

石風呂の起源は奈良時代に遡ることができるとされるが、多くの文献を見るにつけ、その全盛期は近世から20世紀初頭にかけてであったことがうかがえる。この時期、さまざまな地域で石風呂が新たに建造、または増設されていったようである。塚原から風呂もその例に違わず、1911年に新たに石室を1つ増やしている。その後、愛媛の新居浜や今治（桜井）、広島竹原（忠海）などは20世紀後半まで賑わっていたようだが、他の石風呂と同様、後継者不足や施設の老朽化などの問題から閉業を余儀なくされてしまった。ただ唯一、「通常営業」し続けている石風呂として残った塚原から風呂は、その間、焚き手が何人も変わり、石室も何度か改修されている。これは確かな技能の継承と柔軟な経営スタイルがそれを可

能にしたといっても過言ではなかろう。

常連の「指導」のもとで築き上げた岡田さんの技能は、20年近く続く週8回の火入れ作業という「量」に保証されている。本論でも示した通り、岡田さんの2時間の作業は、時間と動作が連動しており合理的で無駄がない。また常連もそれを理解しており、時折動きを邪魔しないように手伝う。「から風呂保存会」の経営スタイルも時代に応じてしなやかに変化してきた。かつて存在していた囲炉裏を「復活」させたり、焚き手の雇用形態も行政とかけあい最善策を模索する。また常連は、塚原から風呂を支援する人的資源としても機能する。このような確かな技能と柔軟な経営、そしてそれを見守る常連との連携が、塚原から風呂の存続を可能にしてきたのである。

本研究は山口大学人文学部地域連携プロジェクト（令和6年度・7年度）より研究助成を受け行われたものである。

【注】

¹ 石風呂の形状に類似している京都八瀬の窯風呂は壬申の乱（672年）の折に、大海人皇子が矢傷を癒したとされる。

² たとえば今回調査対象となった香川県さぬき市の「から風呂」は行基に、山口県山口市の岸見の石風呂は重源にその起源を求めている。またかつて愛媛今治の桜井石風呂は弘法大師（空海）が開いたという伝承が語られている〔愛媛県生涯学習センター1996〕。

³ しかし広島県の丹那などには、湯をはった浴室と石風呂とが併設されている銭湯があり、両者はどちらかに置き換えられるのではなく、徐々に移行していったことが窺える。

⁴ 石風呂の国指定文化財保護は昭和30年代（1955年～）に加速していくが、その背景には民俗学者かつ文部技官であった祝宮静（ほうりみやしず）氏および入江英親氏の活動があったとされる。

⁵ ここでは3件のみとしたが、不定期で開催されている石風呂や石風呂に関連するイベントなどは多数存在する。また定期的といっても辻河原は開催日が確定しているのが、1月1日のみで、それ以外は不定期で行われる。そのためここではあくまでも確定した開催が確認されるという意味で「定期的」とした。

⁶ かつてはさぬき市の東海岸に位置する津田から海水を運んできていたと伝えられている（塚原から風呂の応接室の展示資料より）。

⁷ 『防長風土注進案』では、徳地や周防大島など数多くの石風呂の存在が触れられている。

⁸ この石風呂研究は、印南が周防大島東和町の石造物の調査を行うことがきっかけとなっている。また自身が愛媛県の新居浜出身ということもあり、瀬戸内文化を描くという意味でライフワーク化していたが、印南自身はもともと「風呂嫌いであった」とされる（印南1987：5）。

- ⁹ 施設内の石碑では 1963 年（昭和 38）となっているが、から風呂応接室の掲示では 1958（昭和 33）となっている。ただ、いずれにせよ昭和 30 年代であることは間違いない。
- ¹⁰ 印南の聞き取りによれば、当時の「から風呂」は「風呂番」を受け継いでいた筒井國太に因んで「國太風呂（クンタブロ）」と呼ばれていたとされる。ただ筒井國太は跡継ぎがおらず「風呂番」の系譜は途絶えることとなる（印南 2002：278-279）。
- ¹¹ 地域福祉センター「行基苑」前に建立された石碑の記述より。石碑は当時の長尾町社会福祉協議会会長小西俊雄の名前で記されている。
- ¹² この情報に関しては岡田俊郎さんの話および KSB 瀬戸内海放送の公式ウェブサイト（<https://news.ksb.co.jp/article/13844589> [2026 年 2 月 28 日閲覧]）にもとづいている。
- ¹³ 運営委託料は市から人件費補助の名目で支払われていた時よりも、2 割受取額が減らされてしまったという。
- ¹⁴ サウナブームの火付け役のひとつとなったのが、タナカカツキによるサウナを主題とした漫画『サ道』（2011）である。同書は 2016 年に『サ道 心と体が「ととのう」サウナの心得』として改めて文庫化されている。
- ¹⁵ 2019 年にはインディーズのドキュメンタリー映画、「Perfect Sweat」シリーズの撮影地として塚原から風呂が選ばれた。映画の詳細に関しては以下の URL を参照のこと（<http://www.mikkelaaland.com/perfect-sweat-series.html>：2026 年 2 月 28 日閲覧）

【参考文献】

- 伊能孝, 1967, 「おспеはぬきの原始トルコ風呂 秘湯、桜井の石風呂（愛媛・今治市）」『日本列島禁断の旅（ポピュラー・ブックス）』桃源社 pp.129-132.
- 印南敏秀, 1986, 「V 石風呂 1 東和町内の石風呂」『東和町誌各論編第 4 巻 石造物』東和町 pp.366-385.
- , 1987, 「特集 瀬戸内の石風呂を訪ねて」『あるくみるきく』249：pp.4-33.
- , 2002, 『東和町誌 石風呂民俗誌 もうひとつの入浴文化の系譜』東和町.
- 愛媛県生涯学習センター, 1996, 『臨海都市圏の生活文化：昭和を生き抜いた人々が語る』愛媛県生涯学習センター.
- 大須賀あい, 2023 年, 「1300 年前からあった？ にっぽん“古代サウナ”」『旅の手帖 2023 年 12 月号』交通新聞社 pp.26-27.
- 太田剛, 2020, 『幕末讃岐の種痘医 神内喬本文集』神内國榮刊.
- 梶原藍水（選）・松岡信正（画）, 1854-1857, 『讃岐国名勝図会』国立公文書館所蔵.
- 春名英之・大谷周一, 1927, 「石風呂（伊豫國櫻井町）の醫學的調査」『医事新聞』1226：pp.1558-1569.
- 日和佐初太郎, 1957, 「石風呂にて」『日本カメラ』93：p.101.
- 藤浪剛一, 1931, 『東西沐浴史話』人文書院.
- 西本寮子, 2008, 「広島県立文書館蔵『石風呂入治記』を読む」『中国四国歴史地理学協会年

報』4：2-12.

森直木, 1949, 「今治地方の石風呂の研究」『伊予史談』120：33-39.

柳田国男, 1962 (1915), 「風呂の起源」『定本柳田國男集 14』筑摩書房 pp.404-408. (原著 1915「風呂の起原」『郷土研究』3 (3)：pp.21-26.)

吉積久年, 2011, 「近世入浴文化史考—徳山毛利家文庫『御蔵本日記』から読む—」『山口県文書館研究紀要』38：pp.31-48.

渡邊琢一, 1933, 「談叢 瀬戸内海沿岸地方ノ石風呂ニ就テ」『九大医報』7 (4)：205-211.

所属：山口大学人文学部

E-mail：kbys@yamaguchi-u.ac.jp